様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年４月４日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００８～２０１２
課題番号：２０５３０６９４
研究課題名（和文）　R.シュタイナーと M.モンテッソーリの教育思想にみるホリズム的パラダイムの研究
研究課題名（英文）　Holistic Paradigm Common to Educational Thought of R. Steiner and M. Montessori

研究代表者衛藤　吉則　（YOSHINORI ETO）
所属　広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：６０２７００１３

研究成果の概要（和文）：本研究の成果として、ホリスティック・パラダイムとのかかわりにおいて、シュタイナー教育とモンテッソーリ教育とに共通する諸概念－「社会改革の意図」「秩序と正常化」「集中現象」「敏感期」「感覚教育」「権威」「知・情・意・身体・徳の総合」「深層意識に向けられた教育」「空想と創造的想像力」「ナショナリズムの回避」等が見出された。

研究成果の概要（英文）：As the result of this study, in conjunction with the holistic paradigm, the various concepts common to Steiner education and Montessori education were found – ‘intention of social reform’, ‘order and normalization’, ‘concentration phenomenon’, ‘sensitive periods’, ‘sensory education’, ‘authority’, ‘synthesis among intellect, emotion, will, body and moral’, ‘education for the depth of consciousness’, ‘fantasy and creative imagination’ , ‘avoidance of nationalism’, and so on.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育哲学

１．研究開始当初の背景

本研究が注目する〈神智学〉〈シュタイナー教育〉〈モンテッソーリ教育〉との関係については、これまで〈神智学とモンテッソーリ教育〉に焦点を当てた以下の先行研究がある。江島正子「モンテッソーリにおける宗教教育の人間学的基礎」『モンテッソーリ教育』（第 14 号、1981 年）、山崎洋子「新教育連盟へのエンソワの道－初期エンソワの活動をてがかりとして－」『教育新世界』（第 38 号、1995 年）、岩間浩「ユネスコ設立の源流を訪ねて－新教育連盟とユネスコ設立過程－」『国士舘大学文学部創設 30 周年記念論集』(1996 年)、同「神智学教員組合と新教育連盟」『国士舘大学・人文学会紀要』（第 30 号、1997 年）、同「ユネスコの設立と新教育連盟」『教育新世界』（第 44 号、1998 年）、同「モンテッソーリと新教育連盟」『新教育運動の源流を訪ねて　神智学協会教員同胞会、新教育連盟、モンテッソーリ、タゴール、三浦修吾・関造

の足跡』（2004 年）。Annie Besant, *An Autobiography.* London 1893. Rita Kramer, *Maria Montessori, A Biography.* Putnam 1976. Elizabeth G.Hainstock, *The Essential Montessori- An Introduction to the Woman, the Writings, the Method, and the Movement.* New York 1978. Sister Christina Marie Trudeau, *A Study of the Development of the Educational Views of Dr.Miria Montessori Based on an Analysis of her Work and Lectures While in India, 1939-1946.* Michigan 1984. ただし、これらの先行研究は、新教育とモンテッソーリ教育についての教育史研究が主たるものであり、神智学とモンテッソーリ教育の思想構造の分析や、それに基づく実践解釈には及んでいない。加えて、シュタイナー教育とモンテッソーリ教育に共通する教育原理を、両者がかかわる神智学を切り口に融合的に導出する試みは皆無であり、そうした試みは本研究が嚆矢といえる。また、双方の教育を見据えた研究は、国内外で 1980 年代後半からはじまり、岩間他著『未来を開く教育者たち　シュタイナー・クリシュナムルティ・モンテッソーリ…』（コスモス・ライブラリー、2005 年）や、Rotraut Buhrlen-Enderle/Beate Irskens, *Lebendige Geschichte des Kindergartens : eine "Bildungsreise" zu Oberlin, Frobel, Montessori und Steiner* Frankfurt am Main 1989 . Achim Hellmich/Peter Teigeler(Hrsg.), *Montessori-, Freinet-, Waldorfpädagogik.* Basel 1992. Marielle Seiz/Ursula Hallwachs, *Montessori oder Waldorf?* Kosel 1996. がある。ただし、これらはシュタイナー教育とモンテッソーリ教育の理論・実践について若干の比較考察をともなうもののほとんどが並列的な紹介に終始し、共通する〈神智学的思考〉にふみこんだ思想分析や実践研究はこれまでなされていない。

以上の先行研究に対し、筆者の近年の研究は、〈神智学に基づくシュタイナー教育思想の構造と日本的受容の実態〉を解明し、わが国に応用できる精神科学的・文化教育学的な教育原理を見いだすことにあった（しかも闘争的排他的なナショナリズムを回避する理論）。その成果は、2005 年の『1920・30 年代におけるわが国の文化教育学理解とナショナリズムとの関係－入澤宗壽のシュタイナー教育思想理解を中心に』（平成 14～16 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）研究成果報告書、総頁数 165 頁）や、2006 年の「日本のシュタイナー教育」『未来を拓くシュタイナー教育』（ミネルヴァ書房）、「『垂直軸』の人間形成モデルとしてのシュタイナー教育思想」『近代教育フォーラム』（第 16 号、教育思想史学会紀要）として著され、2007 年度には、『わが国の新教育・文化教育学における神智学的思想の影響とナショナリズムとの関係』（平成 17～19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）研究報告書、課題番号 17530583）を刊行し、そこでは〈シュタイナー教育と神智学と新教育との関係〉が論究されている。また、「『垂直軸』の人間形成モデルとしてのシュタイナー教育思想」『近代教育フォーラム』（第 16 号、教育思想史学会紀要）では、シュタイナー教育思想を読み解くための「垂直軸」のパラダイムを、バティスタ（John.R.Battista, *The Holographic Model, Holistic Paradigm, Information Theory and Consciousness*, In: Wilber,K.,(ed.), *The Holographic Paradigm and Other Paradoxes. Exploring the Leading Edge of Science,* Boston/London 1985）の理論モデルをもとに提起した。つまり、筆者は本研究の着想を得るまでに、〈シュタイナー教育〉と〈神智学〉と〈新教育〉の関係を理論的に読み解くに至っていた。そして、本研究課題に向かう直接の契機は、モンテッソーリ教育学会（第 39 回全国大会）で、世界的に拡張をつづけるシュタイナー教育とモンテッソーリ教育の人間形成観について講演依頼（招待講演）されたことに端を発する。従来、一般には、シュタイナー教育とモンテッソーリ教育は、「芸術か科学か」「想像力か感覚か」「反知育か知育か」といった対立図式で語られることが多かったが、筆者は晩年のモンテッソーリの思想とシュタイナー教育思想に〈共通した何か〉を予感していた。そうした〈思想的な類似性を読み解く鍵〉を講演に向けた研究の過程で見いだすことができた。それが、シュタイナーが前半生に出会いモンテッソーリが晩年支持した〈神智学〉であった。そして、その見取り図を示したものが、2007 年の「モンテッソーリ教育思想にみる神智学的パラダイムーシュタイナー教育思想の接点」『モンテッソーリ教育』（第 39 号:モンテッソーリ教育学会）となる。この論文は、当学会誌の編集後記で、従来のモンテッソーリ教育の見方に再考をうながすものであると高く評価され、今後、この観点について学会で議論を深めていくべきだと特記された。以上が本研究開始当初の背景である

２．研究の目的

本研究の目的は、閉塞する教育現実を克服するモデルとして、今日、世界的に注目される「シュタイナー教育」と「モンテッソーリ教育」とをとりあげ、両者に共通する理論－実践の構造特徴を解明することにある。とりわけ、両教育に共通するパラダイムとして本研究が注目するのは、両者が共にかかわった〈神智学　Theosophy〉である。これまで指

摘されることのなかった〈神智学〉〈シュタイナー教育〉〈モンテッソーリ教育〉との有機的な関係を解読することで、世界的に支持される両教育の根源原理を描出することがねらいである。オーストラリアの関連施設への約一年の海外留学を含め、フィリピンや日本での関連施設での調査をふまえ、両教育の理論と実践の融合をはかり、わが国が進める「生きる力の育成」に教育原理を与えることをめざした。

３．研究の方法

本研究では、1年目の2月にかけて理論面に特化し、シュタイナー教育思想とモンテッソーリ教育思想の〈理論分析〉をとおして、「各理論の構造」と「両理論に共通する物の見方」を解明した。

つづく、3月からは2年目にかけては、〈実践面〉に比重を置き、オーストラリアの南オーストラリア州にある南オーストラリア大学の客員研究員として留学し、当地にあるシュタイナー派の学校マウント･バーカー･ワルドルフ・スクール（Mount Barker Waldorf School：学校代表：Ms. Libbi Turner）で実践に関する調査をおこなった。

3年目には、南オーストラリア大学とアデレード大学の共同研究者トム･セリック博士（Dr. Tom Stehlik）やアデレード大学の米山尚子講師とともに、学校調査のためのアンケートを作成し、マウント･バーカー･ワルドルフ・スクールで調査を実施した。

4年目には、南オーストラリア大学のモンテッソーリ教育の研究者ピッパ･ミルロイ（Ms. Pippa Milroy）とモンテッソーリ学校（The Hills Montessori School：副校長 Ms. Susan Harris Evans）の調査に向けたアンケートについて協議した。さらに、シュタイナー教育とモンテッソーリ教育の実践にかかわる文献を整理した。

5年目には、シュタイナー学校については、オーストラリアにあるシュタイナー・エデュケーション・ストリームをもつ公立のトリニティガーデン・スクール（Trinity Gardens School：校長 Ms. Vicki Stokes）ならびにフィリピンにある私立のシュタイナー学校マニラ･ワルドルフ・スクール（ManilaWaldorf School：学校代表 Dr. Lorelie Tan）の協力で、7年生から12年生の生徒ならびに教員を対象にアンケート調査を実施した。また、上記シュタイナー学校と一般の学校を比較するため、日本の中学・高校の生徒ならびに教員にも同様のアンケートを実施した。

加えて、モンテッソーリ学校に関しては、オーストラリアの、公立モンテッソーリ学校パラヒルス・ウエスト・プライマリー・スクール（Para Hills West Primary School：校長 Ms. Marg Carter）と、前年に交渉をした私立のヒル・モンテッソーリ･スクールならびに日本の横浜モンテッソーリスクール（高根澄子校長）を訪問し、その実践を観察・調査した。そして、その分析結果を、論文や報告書の形で公開した。

４．研究成果

2008年度は、4月から12月にかけては、〈神智学〉を切り口として、〈シュタイナー教育思想〉と〈モンテッソーリ教育思想〉の理論上の連関を解明し、両思想に共通する教育原理を導き出すことに努めた。具体的には、まず、シュタイナー思想における神智学の位置づけをあきらかにするため、神智学的思想が反映されたシュタイナーの後期著作を考察した。つぎに、モンテッソーリ教育が受けた神智学の影響を解明するためには、インド滞在期以降の著作を、それ以前の著作と比較・検討しつつ考察した。さらに、2009年3月からはオーストラリアの南オーストラリア大学に客員研究員として赴任し、共同研究者の南オーストラリア大学のトム・セリック博士とアデレード大学の米山尚子講師とともに、シュタイナー教育についての理論－実践の共同研究を進めた。

また、この年度には、招待講演「近代的思考のパラダイム」（中国、長江師範学院、2008年3月26日）、招待講演「自由主義の思想と日本的思考」（中国、重慶大学、2008年3月29日）、「今日の教育問題とシュタイナー教育思想」（広島市まちづくり市民交流プラザ、21世紀の人文学、2008年9月27日）、招待講演「シュタイナー教育にみるホリズム的道徳の可能性」（学校と道徳教育（SAME）研究会第3回大会、東広島市立高屋西小学校、2008年12月17日）をおこなった。

2009年度は、ひきつづきオーストラリアに滞在し、共同研究を進めつつ、シュタイナー派の学校であるマウント･バーカー･ワルドルフ・スクールでの実践観察をおこなった。学校のデータを収集したり、授業や課外活動や職員会議に参加したりするなかで、詳細な実践研究を進めることができた。理論面では、シュタイナー教育とモンテッソーリ教育の理論－実践を考察した論文“A Theosophical Paradigm in Montessori Educational Thought: A Point of Contact with Steiner Educational Thought”を書き、それをもとに、つぎに実施するアンケート調査について共同研究者と討議を重ね、アンケートの構想を練った。

また、この年には、マウント･バーカー･ワルドルフ・スクールにて、招待講演（保護者と一般の人）“Japanese Culture”（Mount Barker Waldorf School, Spring Festival 10.21.2009）をおこなった。

2010年度には、アンケート用紙を完成させ、

マウント･バーカー･ワルドルフ・スクールの7年生から12年生と教師にアンケート調査を実施した。さらに、4年生から7年生と10年生と11年生に、「日本文化と書道（Japanese Culture and Calligraphy)」という題で招待授業をおこなった。理論面では、昨年度に書いた英語論文を学会誌用に再構成し、西日本応用倫理学研究会／広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター研究誌『ぷらくしす PRAXIS』(2010年度　第12号、107－122頁）に掲載した。
また、この年度には、マウント･バーカー･ワルドルフ・スクールで招待講演(4/5/6/7/11年生)“Japanese Culture and Calligraphy”（Mount Barker Waldrof School, 3.15-16.2010）をおこなった。
2011年度には、南オーストラリア大学の講師でモンテッソーリ教育を専門とする Ms. Pippa Milroy とモンテッソーリ学校でのアンケート調査について話し合いをもち、アデレードにあるヒル・モンテッソーリ･スクール（The Hill Montessori School）とも交渉を重ねた。しかし、結果的に、今回のアンケート調査がアッパークラス(7年生から12年生)を対象としたものであったため、オーストラリアではまだ高学年の実践は生徒数も少なく十分に機能していないため実施困難であるという結論に至った。この年度は、最終年度の成果をまとめるため、シュタイナーとモンテッソーリの教育実践にかかわる文献をまとめる作業を進めた。
また、この年には、招待講演「シュタイナー教育にみる日本的パラダイム」(竹原市立大乗小学校、2011年6月13日)、ならびに招待講演「今日の教育のあり方を考える－生きた言葉と体験」(三原市立第二中学校、2011 年10月13日）をおこなった。
最終の 2012 年度には、シュタイナー学校については、オーストラリアにある公立のトリニティガーデン・スクールならびにフィリピンのマニラ･ワルドルフ・スクールにおいてアッパースクールの生徒ならびに教員を対象にアンケート調査をおこなった。また、シュタイナー学校の特徴を浮き彫りにするため、日本の中学・高校の生徒ならびに教員にも同様のアンケートを実施した。
モンテッソーリ学校に関しては、オーストラリアにある公立のパラヒルス・ウエスト・プライマリー・スクールと、前年に交渉をしたヒル・モンテッソーリ･スクールならびに日本の横浜モンテッソーリスクールにて実践を観察・調査した。データ解析ならびに学校調査からは、神智学を背景として強調される、「現象への集中・没入」「リズム・秩序」「内的充足」「創造性」「自尊感情」「尊厳としての権威」「知・情・意・身体の総合」「無意識（深層意識）を射程に入れた人間観」「遊びと作業」「空想と創造的想像力」「ナショナリズムの回避」等がシュタイナー教育とモンテッソーリ教育とに共通する特徴であることが判明した。さらに、両教育理論は、今日問題となる学校病理の克服に有効な全人的な心身観や発達観を有し、そうしたホリスティックな教育原理はゆきづまりをみせるわが国の教育現実の克服に寄与でき、わが国がめざす「生きる力（知・徳・体の総合)」や OECD の「コンピテンシー」の育成にかなう理論の提供を可能にし、さらにこれら今日的能力概念を実践へと展開する際のモデルケースとなるものと考えられる。
本科研研究でおこなった、シュタイナー教育とモンテッソーリ教育に共通する神智学に着目した理論･実践の全体像については、論文「シュタイナー教育思想の哲学的基盤」『HABITUS』(17巻、2013年3月)、「シュタイナー学校調査報告」『倫理学研究』(21 号、2013年、6月刊行予定）や科研報告書『R.シュタイナーと M.モンテッソーリの教育思想にみるホリズム的パラダイムの研究』(2013年5月刊行予定)において､まとめ公表した。
また、この年には、招待シンポジウム「どのようにすれば心に響く道徳が可能か」(学校と道徳教育（SAME）研究会第 10 回大会、広島大学、2012年8月18日）をおこなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１４件）
１．衛藤吉則「書評　井藤元著『シュタイナー「自由」への遍歴－ゲーテ･シラー･ニーチェとの邂逅』」日本教育哲学会編『教育哲学研究』第 107 号、233-239 頁、2013 年。(査読有)
２．衛藤吉則「シュタイナー教育思想の哲学的基盤（１）－「哲学的考察の原点」としてのカント的認識論」『HABITUS』17 巻、45-59頁、2013年。(査読有)
３．衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイム（２）－「和解」概念構築の手がかりとして」『ぷらくしす』第13号､143-166頁、2013年。(査読有)
４．衛藤吉則「入澤宗壽」岩間教育科学文化研究所編『世界新教育運動辞典』(分冊・第1巻）15-16頁、2013年。(査読有)
５．衛藤吉則「谷本富」岩間教育科学文化研究所編『世界新教育運動辞典』(分冊・第 1巻）50-51頁、2013年。(査読有)
６．衛藤吉則「シュタイナー学校調査報告」『倫理学研究』第 21 号、2013 年 7 月刊行。(査読有)
７．衛藤吉則、孫玥馨「中国に灯されたシュタイナー教育の炎－移入のプロセスと展望」『倫理学研究』第 21 号、2013 年７月刊行。

（査読有）
８．衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイムー「和解」概念構築の手がかりとして」『ぷらくしす』第 13 号、23-41 頁、2012 年。（査読有）
９．衛藤吉則「近代の肖像　谷本富①」『中外日報』(522 回:2012 年 2 月 28 日 12 面)（査読無）
10．衛藤吉則「近代の肖像　谷本富②」『中外日報』(523 回：2012 年 3 月 1 日 16 面)（査読無）
11．衛藤吉則「近代の肖像　谷本富③」『中外日報』(524 回：2012 年 3 月 7 日 7 面)（査読無）
12．Yoshinori ETO, “A Theosophical Paradigm in Montessori Educational Thought: A Point of Contact with Steiner Educational Thought.” *PRAXIS*, No.12, Hiroshima, pp.107-122,2011.（査読有）
13．衛藤吉則「入澤宗壽」『新教育運動研究 Bulletin』第 6 号、6-8 頁、2010 年。（査読有）
14．衛藤吉則「西晋一郎の思想ー特殊即普遍のパラダイム」日本教育哲学会編『教育哲学研究』第 99 号、147-152 頁、2009 年。（査読有）

〔学会発表〕（計３件）
１．衛藤吉則「どのようにすれば心に響く道徳が可能か」（学校と道徳教育（SAME）研究会第 10 回大会、広島大学、2012 年 8 月 18 日）招待シンポジウム
２．衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイムー「和解」概念構築の手がかりとして」（第 11 回広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター例会／西日本応用倫理学研究会、広島大学、2011 年 9 月 25 日）
３．衛藤吉則「シュタイナー教育にみるホリズム的道徳の可能性」（学校と道徳教育（SAME）研究会第 3 回大会、東広島市立高屋西小学校、2008 年 12 月 17 日）招待講演

〔図書〕（計３件）
１．衛藤吉則『R.シュタイナーと M.モンテッソーリの教育思想にみるホリズム的パラダイムの研究』（平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、総頁数 200 頁　［課題番号］20530694）
２．衛藤吉則『わが国の新教育・文化教育学における神智学的思想の影響とナショナリズムとの関係』（平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）研究成果報告書、総頁数 291 頁　［課題番号］17530583）
３．衛藤吉則「Ⅵ　倫理学と教育　第 11 章教育改革と自由主義の倫理、第 12 章　ホリズム的道徳の可能性」『教育と倫理』ナカニシヤ出版、142-168 頁、2008 年。

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
衛藤吉則（ETO YOSHINORI）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：６０２７００１３

(2)研究分担者　なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：